

国を作る

タケムラ ミカ

「それなら国を作らない」と私は言った。

モンクット氏はきよとんとした顔をし、低く響く声で「国を作る？」と言った。

「そう、国」私は答える。

ちなみに「モンクット氏」っていうのは彼の本名では全然ない。来園者投票が何かで決まった、ローリー、みたいな名前があったはずだけど、初めて会った日に「どっかといえはモンクットって感じ」って言ったなら「そのほうがいい」って言われて、それ以来私は彼をモンクット氏と呼んでいる。

そのモンクット氏は檻の向こうで大きな目を伏せ、長い鼻の先で地面に落ちた枯草とかにんじんの破片とかをついついている。

「国ねえ」モンクット氏がつぶやく。「そんな必要があるかなあ」「だって働きたくないでしょ？」私は言う。

「まあ、嫌いなわけではないんだがね」モンクット氏が答える。「楽器鳴らしたり絵をかいたりするのも、ひとつひとつは楽しいけれど、毎日繰り返すとなあ」

「でもそれが国のルールじゃない。シヨーに出て、お客さんを楽しませるのが」

「まあねえ」

「そのルールが嫌なら、自分の国を作らないと」

「そういうもんかね」

「そういうもんですよ」

手のひらの上に、檻の隙間から伸ばされたモンクット氏の鼻が置かれる。鼻先には毛が生えていて、たわしみたいな固さだなあ、といつも思う。

「じゃあ国を作ろうかな」

モンクット氏がそう言うので、私は「それならまず国を出ないとね」と答えた。

そういうわけで、私とモンクット氏は国家元首たる園長のところへ行つて、「モンクット氏の出国手続きをお願いします」と言った。執務机でキリンのぬいぐるみと戦っていた園長は顔を上げて、「何、ローリー、あんた独立すんの」と言った。

「そんなところさ」モンクット氏は頭をゆすつた。体が大きくて園長室に収まらないので、扉から毛の生えた頭をのぞかせている。「本気なら応援するけど。難しいよー、象が一人でやってるのは」

園長は眼鏡をかけ、後ろの本棚から分厚いファイルを取ってばらとめくつた。「なんでも人間用に作られてるからね。道も家も仕組みも。働き口も相当必死で探さないと。うちみたいな象向けの仕事はなかなかないよ」

「いや、働くつもりはないんだ」モンクット氏が答えた。ファイルをめくっていた手が止まり、園長は顔を上げてモンクット氏を見た。

「じゃああんた、どうやって生きていくわけ」

「モンクット氏は国を作るんです」私が代わりに答えると、園長は「国を？」と目を丸くした。「それはまた面倒なことを」

「国を作るのは面倒なのか？」モンクット氏の質問に、国家元首たる園長は大きくうなずいた。

「そりやもう面倒よ。その次に面倒なのが国を出ること。それでも出るっていうなら」園長はファイルから何枚もの紙を抜き出して、ばん、と机の上に置いた。「まずはここにサインして。あとここにも。それから」次々に目の前に突き出される紙に、私は代理人としてサインをし、印鑑を押した。国に登録されていたモンクット氏の情報が次々に目の前に現れる。性別、オス。出生国、タイ。年齢、三十二歳。私と同じ年だ。

すべての書類にサインと印鑑を完了するのに半日かかった。終わるころには私の手は腱鞘炎みたいにびりびり痛んだし、印鑑を押すたびに内容の確認をさせられ、人間の細かい文字を目を細めて読んだモンクット氏もげんなりしていた。最後の書類の記入を終わらせ、委任状にモンクット氏の足印をべたんと押して（ほとんど書類を踏みつけただけだ）、モンクット氏は「ようやく出国か」とむわつと息を吐いた。園長は「まだに決まってるでしょ」と言った。

「内容の確認があるから一日はかかるわ。最短で明日の昼前ね」園長の言葉に、モンクット氏は足を踏み鳴らす。「あんまりだ」

「ルールだから仕方ないじゃない」

「園長なんだからどうにかならないのかい」

「できたらいいんだけどねえ」園長は眼鏡をはずし、眉間をつま

んでもにも揉んだ。「ぞうの国のルールって、日本って国のルールに従ってるからね。そう簡単には変えられないわけよ」

モンクット氏は悲しそうにばおんと鳴いた。

「それにローリー、あんた裸で出ていくつもり？」園長が言う。「外じゃ犯罪よ。せめて上着くらいは着たほうがいいわ」

「しかし」

「しかしウミウシもないの。どうせ一日は出れないんだから、その間に背広でも仕立ててあげる。あなたは」園長は私に顔を向けた。

「明日になったら迎えに来て。それでいい？」

「大丈夫です。よろしくお願いします」私は頭を下げ、振り向いてモンクット氏を見上げた。「じゃあまた、明日の午前中に来るね」

「ウミウシって何なんだ」モンクット氏が言った。

次の日の昼にぞうの国に行くと、氏はすでに入り口のゲートの下に立っていて、麻のゆったりしたジャケットと同じく麻のハットをかぶっていた。

「似合うじゃん」と私は言った。

「肩が窮屈なんだ」モンクット氏は疲れた様子だった。「前足を振り回すこともできやしない」

「普通は振り回さないんだよ」

「私の国では振り回しているし、服も着なくていいことにする」

象使いたちがやってきて、モンクット氏に花束を渡した。「元気でやっていけよ」象使いの一人が言う。「いい国ができたら俺も住ませてくれ」

「どんな国に住みたい？」モンクット氏が尋ねると、象使いは「戦争をしない国」と答えた。モンクット氏はばおばおと笑った。

「普通はしたがるないだろう」

象使いは複雑な表情で彼を見上げた。私はモンクット氏の肩をたたき、「とりあえず前足じゃなくて、腕、って言ったほうがいいね」と言った。それでモンクット氏は花束を鼻から前足に持ち替えた。

けれど出国までにはそれから一時間も待たされた。ひどく暑い日で、太陽が私やモンクット氏をじりじり焼き、象使いたちもとつくに室内に引っ込んでいた。氏は後ろ足で立つのをやめて、しおれ始めた花束をばりばり食べた。ようやく園長が日傘をさしてやってきた時には、私たちはほとんど溶けたウミウシみたいになつていた。

「はいこれ。あなたの出国証明書」園長は一枚の布を差し出した。

「どうして布なんだ」

「紙だと破くでしょ」園長が言った。「まあ頑張つてね。戻つて来いとはいわないけど、戻つたら歓迎するわ。入国手続きには証明書を忘れずに」

「それもまた面倒なんだろう」モンクット氏はげんなりと言った。

「それがそうでもないのよ」園長は答えた。「入るのは意外と簡単なの。どこも国民不足なのね、きつと」

「国を作るには」と私は言った。「必要なものが三つあるよ。国土と、国民と、主権」

「ああそう」モンクット氏はあまり真剣に聞いていないように見えたが、私は構わず続けた。

「国土はわかるよね。土地がなければ国にならない。国土があつても、国民がいない国はただの土地でしかない。主権は」列車が一度大きく揺れて、私たちも一緒に揺れた。モンクット氏のお尻が二人掛けの座席からずり落ち、居心地悪そうに座りなおしていた。

「主権は」私は言い直す。「国民が、自分の国の政治を決めるつてこと」

「政治？」モンクット氏の大きな茶色い目が私を見下ろした。氏の頭はほとんど天井につかえていて、天窓との間で帽子がつぶれ、頭の毛がわさわさとはみ出していた。

トロッコはがたがたと揺れながら、小湊鉄道線を上り方向に進んでいた。たまたまトロッコの時間に重なり、しかも展望車が空いていたのはラッキーだった。普通の車両ならモンクット氏は乗り込めなかつたと思う。

「そう、政治」私は答えた。

「面倒くさそうだなあ」モンクット氏はつぶやいて、耳をばたばたと動かした。乾いた土と草の匂いが私の顔に吹きつけた。展望車には私たちのほかに一組の家族連れと、カメラを持った老人が一人と、大学生らしきカップルが一組いた。カップルが少し顔をしかめ、小声でささやき合っていた。

「その、それやめなよ。耳動かすの」

「なぜ？」ばたばた。

「ほかの人にも風が当たるし、なんか土みたい匂いがするし」

「土なら臭くはないだろう。それとも耳を動かすのは禁止なのかい？」

私は答えなかった。それで、モンクット氏は耳を動かしていた。展望車の窓にはガラスがないので、真昼間の熱気とともに小さな虫が車両の中に飛び込んできた。虫はモンクット氏の頭の周りをぶんぶん飛び回っていたが、その羽音よりがたびし揺れるトロッコの音のほうがずっと大きかった。

「いずれにせよ」私は声を張り上げる。「まずは国土からだね。どこにする？ 千葉県内なら、御宿とかおすすすめだけど」

「国土か、国土」モンクット氏は呻くように言う。

「ないと駄目かなあ。国土」

「そりゃそうでしょ。国の条件なんだから」私は鼻で笑った。「土地がないと認めてもらえないよ」

「誰に認めてもらうんだい」

「さあ。国連とかじゃない？」

「土地がほしいわけじゃないんだけどなあ」モンクット氏は言う。車両の外を青々とした水田が流れてゆく。水田に張られた水の上に空が映ってきらきらしている。横の座席に座っていた老人がカメラを構えて、シャッター音がぱしゃぱしゃ響いた。私は水田を指さし「あれと同じだよ」と言う。

「土地があつて、住んでいる人がいて、その人が何を育てるかを自分で決めて、ようやく水田ができるわけ」

「あれは？」モンクット氏が鼻で指した先には、小さいながら青々

と茂った林があつた。トロッコは林に向かって進んでいる。

「国民はいないし国土もないが、成り立ってるじゃないか」

「林だって日本の持ち物じゃない」

「林はそうは思っていないだろう」モンクット氏は言った。「私もそう思っていない」

トロッコは林の中に入り、日光が遮られた。気温が数度下がった気がした。ひんやりとした空気がトロッコに流れ込み、葉っぱや枝が窓枠にびしびしと当たった。後ろの席で赤ん坊が泣きだした。母親があやし、父親が困った顔で人形をふったり、いないないばあをしたりしていたが、両親の努力にもかかわらず赤ん坊は全身全霊で泣き叫んでいる。

突然モンクット氏が立ち上がった（もつとも天井の高さ的に中腰のままだったけれど）。モンクット氏はぎしぎしと床を踏みながら後ろの席に近づき、母親が気づいて目を丸くした。氏の鼻が赤ん坊の顔の前に伸ばされて、赤ん坊がぬれた頬を上げ、氏の鼻の穴を見た。

「君、元気な鳴き声だなあ！」甲高い声がモンクット氏の鼻先から飛び出して、私はびっくりした。赤ん坊も目を丸くしている。いったいどうやっているのか、モンクット氏は口を閉じたまま、腹話術師のように鼻先をぱくぱく動かしてしゃべっていた。

「私の国の国民にならないかい？」

「やめなつて」私はモンクット氏のジャケットの裾をつかんで引き寄せ、氏はどすどすと足音を響かせながら後退して、もとの座席に大きなお尻を落ち着けた。ちらりと見ると、家族は目を丸く

してモンクット氏を見つめていた。私はモンクット氏に顔を近づけた。

「びっくりしてるじゃない」

「ただ勧誘しただけだがねえ」

「赤ちゃんをね」赤ん坊はまだモンクット氏をじっと見ている。

「ご両親の許可なくそんなことしちゃダメ」

「なぜ許可がいる？ 本人次第だろう」釈然としない、というようにおんと息が吐き出された。「あの小さな人間は誰の持ち物でもないじゃないか」

「それはまあ、そうだけど」

トロッコが林を抜けた。ぎらぎらした陽光が再び車内に差し込み、カップルが水筒の水を分け合って飲んでいる。遠くに山が見え、線路の周りには美しい草原が広がっている。

「国民は、来たい人だけ来てくれればいい」モンクット氏は窓から鼻先を出した。しわに埋まった目を細めて、長いまつげが風こそよそよと揺れた。セミが鳴いていた。「土地も権力もほしくない。私は自分のルールで生きたいだけだ」

モンクット氏のおなかから、ごろごろと、雷鳴のような音が響いた。氏は鼻先で自分のおなかを撫で、「さっきの花束だな」とつぶやいた。

「大便がしたいのだが」

「本っ当にやめて」私はモンクット氏をにらみつけた。

がたぴし鳴っていたトロッコが、がたん、と一度激しく震えて

止まった。駅に着いたのかと思ったがそうでもないようだった。周りは草原で、先にも後にも線路が続いている。少し待っても車両は動き出さず、家族連れやカップルも不安そうに顔を見合わせていた。

「なんだろうね」私はモンクット氏に言ったが答えはなかった。氏はひどく深刻そうな、この世の終わりのような顔をしていて、どうしたんだろう、と思った次の瞬間に立ち上がり、どすどすと足音を響かせてトロッコから降りて見えなくなった。近くの茂みから鳥が数羽ばさばさと飛び立った。

車掌がトロッコに歩いてきて、額の汗をハンカチで拭き拭き言った。「えー、ただいま車両に不具合が生じておりまして、その、えー、車両が動かない状態になっており、その、お急ぎのところ大変申し訳ないのですが、えーと、次の車両が来るまで、お席にて少々お待ちくださいませ」

横の窓からモンクット氏の顔がのっそりと現れて、私は声を上げた。氏は先ほどの様子が嘘のように微笑んでおり、日向で発酵させた草のような芳香がほんのり漂った。

「すつきりしたよ」氏はばおばおと笑う。「すさまじい解放感だ。で、何だって？」

「あ、えーと、列車止まったって」

「止まった？」モンクット氏の大きな目が細められる。

「じゃあどうして降りて歩かない」

「席で待つてろって言われたんだよ」私は言う。カップルがスマートフォンを覗き込んで「やば。宿の時間どうしよ」と言っている。

「次が来るから待っててさ」

「次はいつ来るんだ」

「あー、ちょっと待ってね」私はスマートフォンを取り出して時刻表を調べた。「大体五十分に一本出てるから、それくらいかな」

「五十分!?」モンクット氏は鼻からぶほんと息を吐いた。カメラを持った老人が振り向いた。

「五十分も待たされたら、蒸しバナナになってしまっじゃないか」

確かに氏の言うとおりだった。動いていないトロッコの車内にはまったく風が吹き込まず、日光ばかりが車内に差し込んでいた。後ろの席では家族連れがまぶしそうに目を細めていた。赤ん坊を抱きかかえる父親は、窓を背にし、赤ん坊に直射日光が当たらないようにしている。その横で母親は帽子のつばを下げ、小さなうちで赤ん坊の顔をあおいでいた。

「でも、ほかにどうしようもないでしょ」私はモンクット氏に言った。「次の駅までどれくらいかかるかもわかんないし、だいいち炎天下の線路をずっと歩くほうが危ないじゃない」

「駅に行かずとも、木陰か水場くらいはあるだろう」

「木陰か水場じゃどうしようもないよ。氏と違って、人の作ったものの中じゃないと生きていけないの、人間は」

「そういうものかね」

「そういうものでしょ」

私はきっぱりと答えた。モンクット氏はふうむ、と唸り、大きな茶色の目をしばしば瞬かせて考え込む。赤ん坊がまた泣きだしたが、さつきよりも小さい、しゃくりあげるような泣き声だった。

モンクット氏の顔がひっこめられた。と思うと、今度は私の横ではなく後ろの、家族連れの横の窓から、モンクット氏の長い鼻がぬうっと差し込まれた。母親があつと言って口を押さえた。車内に入ってきた鼻先には、さつきまで氏がかぶっていた大きな麻の帽子がつままれている。

氏の鼻は、帽子を家族の真上にぼすりと落とすとした。帽子はとてもし大きかったので、母親と父親と赤ん坊の三人はその下にすっぽりと隠れてしまった。帽子は日光を受けて真っ白に光り、三人をその光の直撃から守っている。「あ、ありがとうございます」と母親の声がした。

モンクット氏の鼻がするりと窓の外に消えた。私は窓から身を乗り出して外を見た。氏の大きなお尻が、のったりと揺れながら線路の前方に向かい、車両の前を回って消えたところだった。そのまま少し見ていたけど、氏は席に戻ってこない。もしかしたらひ弱な人間のことは見捨てて、自分だけで木陰を探しに行ってしまったのかもしれない、と思った。

と、突然トロッコが揺れた。トロッコは一度、びし、ときしみ、それからごろごろと車輪の回りだす音がした。展望車にとどまっていた車掌が飛び上がり「なんだあ？」と言っている。トロッコは先ほどまでと遜色ない、むしろ先ほどよりも速いくらいの速度で走り出し、窓から風が吹き込んだ。「え、何何」とカップルが顔を見合わせる。

私は席を立ち、前の客車に走って行って窓から身を乗り出し、車両が進むほうを見た。モンクット氏の揺れるお尻が視界に映っ

た。それから、どすどすと音を立ててレールを踏みしめる、丸太のような四本の足が見えた。

モンクット氏はジャケットを着ていなかった。氏は脱いだジャケットを麻縄のようによじり、先頭車両に引っかけて、身体一つで乗客を乗せた全車両をけん引しているのだった。

「大丈夫なの!?」がたがた揺れる音にかき消されないよう叫ぶと、モンクット氏は鼻を高く上げ、ぱおん、と鳴いた。

「大丈夫! 何しろ私は、国を作る象だからね!」

乗客たちも窓から身を乗り出した。象さんだ、すごい、引っ張ってくれるの? 口々に発せられた言葉がざわめきになる。老人が、氏のお尻をばしゃばしゃ撮影した。それらが聞こえていたかはわからないけど、モンクット氏はまたぱおんと鳴いた。

「皆に伝えておいてくれ! 私の国に来たいなら、だれでも歓迎するよ!」

彼の叫んだ言葉に、乗客たちは思わず、おお、と声を上げた。自然に巻き起こった拍手が車両のがたびし揺れる音と混ざり合った。

結局、氏が列車を三駅ほど引っ張ったところで後発車両がやってきて、乗客たちはみんなそちらに乗り込んだ。さすがのモンクット氏も息を切らせ、「本当に助かりました」とカップルが差し出した水筒の水を全部飲んだ。

動かないトロッコ列車はどうするのかと思ったら、後発車が押していくらしい。後発車はトロッコじゃないのでサイズのモン

クット氏は乗れない。私たちは終点まで歩くことにした。

黄色と赤の、どことなくもっちりした列車が動きはじめ、乗客たちが窓から身を乗り出して手を振っていた。さようなら、ありがとう、と口々に声が上がると、赤ん坊を抱く両親がもらった帽子を大きく振っていた。それに応えて、モンクット氏は長い鼻の先につかんだ布を振った。

「それは何」

「出国証明書さ」布を振りながら氏が答える。

やがてトロッコが行ってしまい見えなくなると、草いきれの中に私たちだけが取り残された。さわさわと揺れる草の音、向こうの木立から聞こえてくるセミの声。日差しは依然強く、私の首筋には汗がにじんでいたが、ゆるやかに流れる風が心地よかった。私たちの前には、まっすぐどこまでも続くレールがある。と、モンクット氏が身をかがめ、毛の生えた頭を私のほうに差し出した。

「乗っていくかい?」

「いいの?」私は素っ頓狂な声を上げてしまった。

「大変じゃない?」

「なんの。私はトロッコを引いていたんだよ? 人間一人くらいどうってことないさ」

それで私はモンクット氏の頭、というより首の付け根の当たりに腰を下ろし、氏のゆったりした歩調に合わせて揺られていた。氏の肌は固かったけれど案外しなやかで、体重を無理なく受け止めてくれた。私の手のひらにはごわごわした長い毛を無意識に撫でていた。

トロッコを引いていた時は走っていたモンクット氏も、今はゆったりと穏やかな歩みで進んでいた。私は日よけ代わりに出国証明書をかぶっていたけど、日が傾き、ヒグラシが鳴き始めるころにはそれもいらなくなつた。太陽が沈んで、空は宇宙の一番きれいなところみたいな色をしていた。そよそよと夜風が流れる。レールの脇を歩きながら、モンクット氏はぼつり、とつぶやく。

「これも国の持ち物なのかねえ」

私は口を開き、そうだよ、と言おうとした。ここは日本で、日本の国土だから。だけど結局言えなかったのは、こんなにきれいな場所が誰かのものだって思うのが、なんか嫌だつたから。

「この風景が持ち物なら」モンクット氏は言った。「この風景を持つていない誰かが、欲しくなることもあるだろうな」

「……そうだろうね」

「その時はどうするんだ？」

「奪うんだよ」私は言った。「奪って、自分のものにするんだ」

「自分のもの、か」

モンクット氏は低く静かに言った。怒っているわけでも悲しんでいるわけでもなく、ただ静かな声だつた。

「自分以外に、自分のものなんてあるのだろうかね」

空には星がきらきら光っていて、夜の虫たちが鳴いていた。少し肌寒くて、私は出国証明書を肩に巻きつけた。

ぼつりぼつりと話しながら進み、終点の五井駅に着いたときにはもう空は真つ暗だつたけれど、街の明かりで星は見えなかった。

私は氏から降りた。私たちは養老川沿いを歩き、海岸の公園にた

どり着いて、並んで座つた。すぐ先のほうで暗い夜の海がうねっていた。

対岸では石油のコンビナートや火力発電所がほの暗い輝きを放ち、黒々としたクレーンが空に突き刺さっている。工業地帯には昼も夜も関係がない。

「人間って感じだよ」私はつぶやいた。氏がこちらを向いた気があつたが、私の目は対岸の風景にずっと注がれていた。

「私たちが生きるには、ああいうものが必要なんだ。ああいうのを作るために、土地や、人や、政治が必要だつたんだよ」

ざばん、と小さな音がしていた。どこか見えないところで、堤防に波が当たつてくだけている。

「考えたんだが」

おもむろに、モンクット氏が口を開いた。

「私は、国を作るのはやめることにするよ」

私は対岸から視線を離し、氏の長いまつげと、茶色い目と、細かいしわだらけの大きな横顔を見た。氏は目だけを動かし、横目で私を見下ろした。

「じゃあ」私は口を開く。「どうするの？ ぞうの国に戻る？」

「私は」

氏が少し口ごもつた。氏の乾いた土のような肌は、人工的な照明によって照らし出されていて、その明かりは氏の肌にあまり似合わないな、と思つた。

「私は、国になろうと思つた」

私はぼかんとして氏の顔を見た。

「国になる、って」

「三つあればよかったんだらう？ 国土と、国民と、主権」

「そうだけど。国土は？」

「私自身。私の、この身体」

「国民」

「私自身と、国民になりたいと望む人。望むなら私に乗ればいいし、嫌になったら下りればいい」

「主権」

「私が私の意志で、私の行きたいところに行く」

モンクット氏が口を閉じると、また波の音が聞こえた。その向こうから、ごうん、ごうん、と低い音がかすかに聞こえていた。都市がゆつくりと呼吸しているみたいな音だった。

「どうかな」

モンクット氏が少し不安そうに、私に顔を向けた。私は目の前に現れた鼻に手を伸ばし、ごわごわとした毛をそっと撫でた。

「言い忘れてただけど」私は言う。「国が成り立つ条件には、もう一つあるの」

モンクット氏が目を丸くした。

「なんだい、それは」

「承認。ほかの国が、その国を国だと認めること」

「つまり？」

「つまり」私は反対の手ですっと持っていたものを、氏の鼻先にそっとかけた。

「私は、モンクット氏、あなたが国であると認めます」

ざばん、と波の音がした。

氏は少しの間私の顔をじっと見下ろして、それからその茶色くて思慮深そうな目が優しく細められた。私もにっこり笑って氏の顔を見返した。

かけられた出国証明書を、モンクット氏の鼻先が暗い空に向かって高く掲げた。夜風と照明の明かりを受け、布製の出国証明書はばたばたとはためいた。サインの書かれた表側と、まっさらな裏面が交互に現れる。

「まっさらっていうのは味気ないね」私はモンクット氏に寄りかかった。「もっと国旗らしくしたら？ 模様付けるとか、色塗るとか」

「じゃあ、絵でも描こうかな。私の絵」

モンクット氏は笑った。

「実は、絵を描くのは好きなんだよ」

氏はばおん、と一声鳴き、その声は式典のファンファーレみたいに夜の工業地帯に響いた。